

# 虹を追う少年



夢遊星人

.....

その日の朝、タラウは生まれて初めてアマンガー狩りに出ることを許されたので、嬉しくてならなかった。お父の支度ができる前から、もう我慢ならないで、家の外へとびだし、この日のために河原からとがった石を拾ってきて、一生懸命といだのを、まっすぐな木の枝に蔓でしっかりと巻きつけたモリを、手に振りまわしながら、草ぶきの家のまわりをとびはねた。弟や妹たちがそのあとを追って、いっしょにはねながら、羨ましそうにタラウとその新しいモリとを、交互に見た。タラウは得意になって、弟と妹にアマンガー狩りの話をして聞かせた。みんなお父の受け売りだったが、なんども話すうちに、タラウはもう狩に出かけて、モリを手にした大きなアマンガーと勇ましく闘ったような気がしてきた。

アマンガー狩りに出かけるのは、この村では一人前と認められることである。この村で信頼されるひとりの男として、自他共に認められることである。お母も朝からそわそわしていた。この日のためにと、特別な木の繊維で編んでおいたチョッキのような上着を、裸のタラウの腕に通して、胸と腹のところでしっかりと結んだ。これまで腰布のほかに、衣服らしい衣服を着たことがなかったタラウは、それをまた誇らしく思った。裸の弟や妹は別のタラウを見ているようで、しばらくは遠巻きに見ていた。

やっとお父が出てきた。ほかの家からも、今日アマンガー狩りに出かける少年たちと、大人たちがやって来た。タラウといっしょに、一人前になるための試練を受ける少年は三人いた。みんなお父といっしょか、お父のいないものは、代わりの大人に連れられていた。少年たちはどれもタラウと同じ恰好をしていた。お母やお婆の編んだ上着を着て、手にはやはり手製のモリをたずさえていた。少年たちは互いに目を見交わせた。みんな同じ村の遊び仲間だが、今日だけは試練の前の緊張と、家同士のライバル意識で、よそよそしい態度をとっていた。タラウはしかし、みんなが固くなっているのがおかしかった。どうしてみんな、もっと嬉しそうな顔をしないのだろう。

大人たちはもちろん、アマンガー狩りには慣れているので、落ち着いた様子で、今日の手はずについて相談している。その間も、タラウたち新米は、互いに横目で仲間をうかがっている。タラウも少し心配になってきた。今日のアマンガー狩りで臆病な態度を取ってしまわないだろうか。そしたら、村中の笑いものになって、女の子たちにも馬鹿にされて、もうこの村にはいられない。そんなことになるくらいなら、アマンガーに食べられてしまったほうがまだ。でも食べられるのも、さぞ痛いだろうな。

いよいよ出発だ。少年たちの家族や村人たちが集まってきている。タラウの目は、その中に一人の少女の姿を探していた。少女たちは少し離れたところに集団をなして、これから男の世界に入ろうとする少年たちを好奇の目で見つめていた。タラウは少女と目が合うと、赤くなってあわてて目をそらした。ほかの少年たちも、同じように彼女の方を見ていたことには気づかなかった。タラウは一番先に立って駆けだした。大人たちは笑いながらゆっくり歩いてくる。ほかの少年たちも、タラウの気分感染されて駆けだした。森の前まで来て、少年たちは大人のやって来るのを待った。大人たちも、見送りの村人も、だいぶ遅れてなかなか姿が見えない。一人の少年が

タラウに言った。

「タラウ、おまえばかりはりきってるな。おまえ死ぬのこわくないのか」

「おいら死ぬもんか。アマンガーをやっつけるんだい」

「アマンガーってすごいんだぞ。お父が言ってた、おいらの背丈の、五倍も十倍もあるって」

「そうだぞ、そして毒の息をおいらたちに吹きつけるんだ」

別の少年が興奮して口をはさんだ。

「そんなのへっちゃらだい。おいらのあ父が言ってた、ちゃんと耳と鼻に薬草をつめるんだって」

「だけど目につめるわけにはいかないって。だから、おいらたちにはアマンガーの本当の姿が見えないんだって」

「そんなことは、おいらのお父がちゃんと教えてくれたい」

その時、大人たちの姿が見えてきた。少年たちはそれぞれの保護者のもとへ駆けよった。見送りとはここで別れることになっている。母親らは最後の激励を少年たちに送り、上着の紐がしっかり締まっているか、もう一度確かめてやった。タラウはお母のくどくど言う注意をうるさく思った。後ろにさがってタラウのことを眼を丸くしてながめている、弟たちや妹たちのてまえ、もう子供あつかいされたくなかった。それに、とりわけて目のはしで気づかれないように意識している、一人の少女の前では。それでお母の手を振り切って、お父の方へ駆けていった。お父は大きな棒ぐいを、モリといっしょに背にかついでいる。お父のモリをタラウは誇らしげに受けとった。やがてタラウとお父が先頭に立って、アマンガー狩りの一行は森の中へ分け入っていった。

タラウと少年たちは歩きながら、今日の手はずをあらためて大人たちから聞かされた。アマンガー狩りには入江を通らずに、密林を抜けて行く。ここから四分の一日ほど歩いた密林の奥に、ふだんはめったに人のよらない湖がある。アマンガーはそこに棲んでいた。聖なる生きものであるから、狩ることはタブーとされていたが、大昔から年に一度だけ、大人となる少年たちにだけ狩が許された。しかし少年たちだけではとても手に負えないので、その日は大人も参加する慣になっていた。タラウたち少年四人と大人四人で、ひとつのアマンガーを倒す。決してそのほかのアマンガーに手を出してはならない。アマンガーは湖の岸辺の浅いところに、半分姿を現わしている。しかし、その姿は直接見ることはできない。アマンガーのいるところには、湯気のようにゆらゆらとシンキロウが立ちのぼっている。

「お父、シンキロウってなんだ」

タラウは何度も聞いたことを、また問い直していた。

「シンキロウというのはな、何もないものがそこにあるように見えることだ。なんでも、美しいものや、欲しいものを思い浮かべると、そいつが本当に目の前に現われてくるのだ。嬉しくなってそいつと遊んだり、そいつを取ろうとしたりすると、知らぬ間にアマンガーに食べられてしまうのだ。だから、アマンガーをやつける時には、余計なことを考えてはいけないぞ。ただアマンガーを倒すことだけを考えるのだ」

「おいら欲しいものなんて何もないやい」

タラウはむきになってそう言った。言ってしまうと、お父に嘘をついたことに気づいた。

タラウはこのアマンガー狩りに、お父にもだれにも話せない目的を持っていた。タラウの村に、オワナという名の村一番の器量よしの女の子がいた。オワナは村中の少年たちの憧れの的だった。少年たちは競いあってオワナのご機嫌をとったり、贈り物をしたりした。オワナはいつも女王のように、周りに少年たちを引きつけていた。タラウも、たいていその端につらなっていた。タラウはオワナの前に出ると赤くなって、何も話せなくなってしまう。だから、ほかの調子のいい少年たちに、ずいぶん遅れをとっていた。ところが、アマンガー狩りの近づいたある日のこと、ほかの少年たちの見ていないところで、オワナはあまい息のかかるほど顔を寄せてきて、タラウの耳に囁いた。

「あたい、おまえが好きだよ。でもね、あたい、なんにも贈り物くれない子は嫌いだ。あたいに虹の珠をとってきてちょうだい。そしたら、あたい、おまえともっと仲良しになってあげる」  
タラウは真っ赤になった。ドキドキする心臓が、喉もとまで飛びだしてきそうだった。

「でも、虹の珠は取ってはいけないんだ。湖に返すんだよ」

「ふん、それならほかの子に頼もうかな。あたいがおまえだけを見こんで、頼んでいるというのに」

オワナはそっぽを向いた。しかし、横目で自分の言葉の効果をタラウの表情に確かめていた。

「わかった。おいら絶対に取りってくる。だれにも渡さないよ」

「そうかい、おまえって案外頼もしいんだね。あたい好きになっちゃった。でも、あたいに頼まれたって、だれにも言っちゃだめだよ」

オワナははすっぱに言うと、タラウの首に腕を巻きつけた。タラウは自分だけがオワナに信頼されて、大事な任務を言いつかったと思い、有頂天になったが、オワナは今度アマンガー狩りに行く少年たち全員に、同じことを、同じような親しさを見せて、言いつけていたのである。

途中でひと休みした時、大人の一人が袋の中から薬草を取りだし、みなに分けた。タラウはお父のするとおりに、両耳の穴と鼻の穴に、きつい匂いのする丸めた薬草をつめた。急に耳が遠くなり、息がしづらくなった。でも、この薬草のおかげで、ほんとうは聞こえない音を聞いたり、眠くなるような香りを嗅いだりしなくてすむのだ。あとは目に映るものだけに注意すればよい。何も余計なことを考えさえしなければ、アマンガーのシンキロウはただゆらゆらと揺れる、真珠色の光の柱に見えるだけだ。

湖に近づくにつれて、一行の足取りはだんだん慎重になっていった。アマンガーは遠くから人の近づく気配を嗅ぎつける。入江を通らずに来たのも、水の上を来る者には敏感に反応するからだ。用意のない者は、たちまちシンキロウの中に捕われてしまう。森が途切れて、樹々の間から広い湖の明るい水面が現われ出た。その光景に見とれている余裕はなかった。一行は湖岸に沿って、用心深く進んだ。アマンガーがいるのは、砂の岸が広がって、湖が遠浅になっているところだ。

すると、先頭に行く大人が、急に身振りであとの者たちを制した。今まで何もなかったように見えた前方少し先の水際で、突然空気が日の光をはじいて、ゆらめきだすように見えた。タラウは息をのんだ。ほかの少年たちも、大人たちの傍らで固くなったようだった。タラウの方を振り



向いたお父の眼が、何も考えるな、何も考えるな、と言っているようだった。ゆれる光の柱はだんだん広がって、急速にこちらへ近づいてきた。あっという間に、あたりは光の霧につつまれたようだった。ひとつひとつの水滴が七色の光をはじき、だんだん集まりながら、ものの形をとり始めていた。太陽はもうどこにあるのか、見つからなかった。

タラウは初めて怖くなった。自分ひとりだけこの不思議な世界にとり残されて、みんなはもうとっくに逃げ去ってしまったような気がした。おいらはアマンガーに食べられてしまうんだ。おいらが虹の珠を横取りしようなんて考えたから、アマンガーは怒っておいらだけをねらっているんだ。

急に腕を引っぱられて、タラウはいよいよアマンガーにつかまったと思い、女の子のように叫んでしまった。腕を引っぱっているのはお父だった。タラウは女の子のように叫んだのが恥ずかしくなった。みんなに聞こえたらうか。お父は前に進めというジェスチャーをしている。目がくらくらして、ほかの者たちの様子が分からないが、みんな先へ行ったらしい。お父のいらいらした様子でそれが分かる。タラウはあわててお父のモリと自分のモリを両手にしっかり握って、お父のあとをおって走りだした。水遊びで水をばしゃばしゃかけられている時のように、一面に光る水滴が顔を打つ中を、タラウはひたすら走った。もう何も考えなかった。最初の臆病風を、なんとかみんなの前で挽回したかった。みんなにあとで笑われるのは、とてもたまらない。

タラウはお父のあとを走りながら、前方を見た。どのくらい先か分からぬところで、真珠色の柱がゆらゆらゆれていた。その柱が広がって天に達するところで、大きな虹がかかっていた。柱は天の半分をおおいつくさんばかりに、左右にぐんぐんと広がりながら、タラウの方へ落ちかかってくるように思われた。お父は走りながら、肩にかついだ棒ぐいを両腕にかかえ直した。柱が天の半分を越えて、すでにタラウを呑みこもうと、すぐ頭上にまで迫ってきた時、お父は棒ぐいを垂直に立て、両手で支え、両足をふんばらせた。

真珠色の柱はお父の頭上でくずれかかる寸前、はたと止まってしまった。お父はうしろに化石したようにつつ立っているタラウの手からモリをもぎ取り、真珠色の光のもやの中へ力いっぱい突き刺しはじめた。タラウにはお父が気が触れてしまって、五彩にはじける光の渦と格闘し始めたのだとしか思えなかった。しかしほかの大人たちが走りよって、同じように格闘している姿に気づいた。自分があなどったほかの少年たちも、モリを手におずおずと近づいていた。

タラウは夢から覚めたように、猛然と、はじけ散る光の渦へ突進していった。意外にも、モリの先にはしたたかな手ごたえがあるのだった。モリの先は何ものかに吸いつかれるように、ぐいぐいと彼の腕を引っぱり、気をつけないとモリを取られるばかりか、自分も引きずりこまれてしまいそうだった。しかし、だんだんモリの先の抵抗が感じられなくなってきた。それとともに、あたりに散乱していた光の水滴はしだいに薄れだし、頭上をおおっていた真珠色の天蓋も、急速に消えてゆき、最後に天空に再び回復した陽光のもとに、ほのかに浮かんだ虹の橋を残して、タラウの眼の前には巨大なアマンガーの動かぬ正体が、そのむくろをさらしていたのである。いく本かの棒ぐいでかわれたアマンガーの貝殻は、タラウの家の屋根ほどあった。その中に横たわっている白々とした肉塊は仔クジラほどもあった。

杳然としているタラウや少年たちを尻目に、大人たちはアマンガーの解体に取りかかった。ア

マンガーの肉を村まで運ぶには、いく片にも切らなければならない。切った肉片をモリにとおして運ぶのである。ふいに、少年たちがタラウのお父のまわりに走りよった。お父の手のひらには虹色に光るものがのっていた。タラウもはっとして、あわてて走りよった。少年たちも、大人たちも、しばらくその虹の珠を黙ってじっと見つめていた。

少年の一人が手を出して取りそうになった。お父は首を横に振った。誰もが言い聞かされているように、虹の珠は湖に返さなければいけないのだ。そうすることによって死んだアマンガーはふたたび甦り、絶えることなく村人たちを養ってくれるのだ。お父は赤子の頭ほどもある虹の珠を手のひらにのせて湖に入り、できるかぎり遠くへ投げ入れた。タラウはオワナとの約束を思っていたが、どうにもならなかった。

タラウは美しい虹を吐きだす生きものが、自分たちが遠い昔から食用にしているこのなま白い肉塊に過ぎないことを、これまでなんども話には聞いていたものの、今日のあたりに見て、かえって信じるができなかった。あの恐ろしくも美しいシンキロウと、目の前のむくろとを、どうしても結びつけることができなかった。美しいものはあくまでも美しくなければいけない気がした。美しいものが本当はそこにはないものであり、醜いものが真の姿なのだということは、なんだか納得がいかなかった。そして美しいものは危険なものであり、それから逃れないと命をなくしてしまうのだということも、なんだか公平ではない気がした。あの美しいオワナも危険だというのだろうか。そして本当のオワナは、このアマングーのように醜いというのだろうか。タラウは物思いにふけりながら、解体の手伝いをしているほかの少年たちから離れて、ひとり砂の岸を歩いていった。

.....

.....

.....

オワナはさっきから笑みをたやさずに、タラウの顔を見つめている。タラウも夢の中で酔ったように、自分の大胆さを不思議とも思わずに、オワナの顔を見つめ返している。

「いい所? . . .」

タラウは半分夢の中のように聞き返した。

「あたいたち二人で暮らすところ」

「でも、お父やお母が・・・」

と思わず口をついて出た言葉に、タラウはかすかな不安が、湖水のおもてのような喜びの上に翳を落とすのを見た。お父、お母、いっしょの仲間・・・眠りこもうとする意識の底から、なにか針でつくようなかすかな叫びが、彼を一瞬間はっとさせた。タラウは今ここにいるオワナと、出発の時に見たオワナとを重ねてみた。あの時すみの方に、年頃の娘たちにまじって、しきたりに従って控えめではあるが、それでも少女たちの中ではひとときわ誇りたかい姿を、それとなくひけらかしていたオワナ。今まぢかで見るとオワナのサンゴのような赤いくちびるが、揶揄するようにゆがんで、

「あたいより、お父やお母がいいの？」

泡のはじけるようなふくみ声で言って、オワナはくつくつと笑いだした。タラウは恍惚となった。

「どっちも好きだよ。でも、おまえの方がずっとたくさんだな」

「そんならおいでよ」

「だけどみんなが心配するよ。それにアマンガーの肉を運ばなくちゃ」

「そんなのほかの子にまかせればいいじゃないの。ねえ、ほんとにすばらしい所よ。あたいとあんたと二人だけで暮すの」

「どうして二人だけで暮すの。お父やお母はいけないのかい」

「だめよ、夫婦になったら、だれだって二人で暮すことになってるんだから」

「それじゃ、行くよ。でも、お父にだけは話してくる」

「だめ、話しちゃ」

「どうしてだい」

「話したら、あたいの所へ来れなくなる。まだ早いって、反対されるに決まってるんだから」  
オワナは近よって、タラウの手を取った。オワナの手は、モリを握りしめて硬くなったタラウの手のひらの中で、溶けてしまいそうなほど柔らかかった。

「タラウ、どうしてそんなものを鼻につめているの。取ってしまいなさいよ」

「だめだよ、これはどうしても取ってはいけないって。お父が・・・」

「ホホホ、なんでもお父、お父ね。タラウって、ほんとに子供みたい」

「おいらもう子供じゃないよ。今日から大人なんだ。オワナも見においでよ。おいらたちの倒したアマンガーを」

「あたいは見たくないの」

オワナは一瞬間眉根をひそめたが、次の瞬間には笑顔にもどっていた。

「ねえ、あたいの声をもっとよく聞こえるように、その耳につまったものを取ってしまわない」

「そういえば、不思議だ。これまでお父たちの声が聞こえなかったのに、オワナ、おまえの声はよく聞こえるよ」

「ホホホ、女の声は特別なのよ。でも、もっとよくあたいの声を聞きたいと思わない」

「そりゃ、ききたいさ。でも、お父が・・・」

「そのお父はやめなさいって」

「わかった、取るよ」

タラウは耳につめた薬草をほじり出した。すると、これまで聞こえなかったえもいわれぬ音楽が、どこからともなく漂ってきた。風の音のような、波の音のような、甘くせつなく、タラウのオワナに対する気持ちをそのまま表したような、ものういささやきだった。

「さ、タラウ、その鼻につまってるものも取っちゃいなさいよ」

オワナの声は前よりもいっそうすずしく、耳に快かった。タラウは鼻の薬草をほじり出した。するとえもいわれぬ香りがオワナの体から立ちのぼってきた。これまで嗅いだどんな花の匂いとも違って、それでいて妙になつかしい気持ちにさせる甘い香りだった。

「さあ、行きましょう、タラウ」

「うん、オワナ」



オワナは空にかかる虹を指さした。

「あれがあたいたちのお家だよ」

「でも、おいらそんな遠くまで行けないな」

「あたいがついてるから、大丈夫」

オワナはタラウの手を引いて、湖水を渡りはじめた。タラウは足の下に水を覚えなかった。

「さあ、急ごう、タラウ」

二人は手に手を取って、波の上を駆けだした。

.....

タラウの父は少年たちの興奮した身振りで、初めてタラウがいなくなっていることに気づいた。あわてて少年たちの指さす方向へ走って行った。タラウの足跡は、水際に沿って長く続いていた。それから急に湖の中に消えていた。その先どこまで行っても、ふたたび足跡は現われなかった。悲嘆にくれて帰ってくる途中、タラウの父はタラウが鼻と耳からぬいたらしい薬草の塊を、水際に見つけた。お父はそれを拾って帰った。それだけがタラウの亡きがらだった。

（「虹を追う少年」完。）